

大齋節第 5 主日

聖書日課と主教のメッセージ



The dead man came out

日本聖公会東京教区
東京聖三一教会

2020.3.29 大齋節第 5主日

大齋節第 5主日特祷

全能の神よ、み子イエス・キリストは大祭司として来られ、その血をもって至聖所に入り、ただひとたび永遠の贖いを全うされました。どうかご自身を神にささげられたキリストの血によって、わたしたちの良心を死に至る行いから清め、あなたに仕えさせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

旧約聖書 エゼキエル書 37:1-3, 11-14

主の手がわたしの上に臨んだ。わたしは主の霊によって連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされた。そこは骨でいっぱいであった。主はわたしに、その周囲を歩き巡らせた。見ると、谷の上には非常に多くの骨があり、また見ると、それらは甚だしく枯れていた。そのとき、主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか。」わたしは答えた。「主なる神よ、あなたのみがご存じです。」

主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。彼らは言っている。『我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる』と。それゆえ、預言して彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。わたしはお前たちの墓を開く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。わたしが墓を開いて、お前たちを墓から引き上げるとき、わが民よ、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。また、わたしがお前たちの中に霊を吹き込むと、お前たちは生きる。わたしはお前たちを自分の土地に住まわせる。そのとき、お前たちは主であるわたしがこれを語り、行ったことを知るようになる」と主は言われる。

日課詩篇 第 130 篇

1 主よ、深い淵からあなたに叫び // 嘆き祈るわたしの声を聞いてく

ださい

- 2 主よ、あなたが目を留められるなら // 主よ、だれがあなたの前に立ちえよう
- 3 しかし、あなたの救しのために // 人はあなたを恐れかしこむ
- 4 わたしは主を待ち望む、わたしの魂は待ち望む // わたしはみ言葉に寄り頼む
- 5 夜回りが暁を待ち望むにもまして // わたしの魂は主を待ち望む
- 6 イスラエルよ、主に寄り頼め // 主は豊かな贖いに満ち、慈しみ深い
- 7 神は、すべての罪から // イスラエルを救われる

使徒書 ローマの信徒への手紙 6:16-23

知らないのですか。あなたがたは、だれかに奴隷として従えば、その従っている人の奴隷となる。つまり、あなたがたは罪に仕える奴隷となって死に至るか、神に従順に仕える奴隷となって義に至るか、どちらかなのです。しかし、神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、今は伝えられた教えの規範を受け入れ、それに心から従うようになり、罪から解放され、義に仕えるようになりました。あなたがたの肉の弱さを考慮して、分かりやすく説明しているのです。かつて自分の五体を汚れと不法の奴隷として、不法の中に生きていたように、今これを義の奴隷として献げて、聖なる生活を送りなさい。あなたがたは、罪の奴隷であったときは、義に対しては自由の身でした。では、そのころ、どんな実りがありましたか。あなたがたが今では恥ずかしいと思うものです。それらの行き着くところは、死にほかならない。あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴隷となり、聖なる生活の実を結んでいます。行き着くところは、永遠の命です。罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。

福音書 ヨハネによる福音書 11:17-44

さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに来ていた。マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」マルタは、こう言う前から、家に帰って姉妹のマリアを呼び、「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちした。マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに行った。イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。家の中でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、後を追った。マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。イエスは涙を流された。ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかつたのか」と言う者もいた。イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。イエスが、「その石を取りのけ

なさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどこいてやって、行かせなさい」と言われた。

大齋節第五主日の黙想

主教 フランシスコ・ザビエル 高橋宏幸

今日の福音書には有名なマルタとマリアが出てきますが、この姉妹に向かってイエス様は甦りの命、神様の御業を伝えていらっやいます。それに先立ってある悲しい出来事が、二人の姉妹の身の上には起こっていました。それは、兄弟ラザロの死です。ラザロが死に臨む直前イエス様に知らせがなされますが、どういう訳かイエス様は「それは大変だ！私が直ぐに行って何とかしてあげよう！」とは一言もおっしゃいません。

マルタにしてもマリアにしても、ラザロが極めて危ない状態に在るし、望みも薄らいできているだけに、こういう時こそイエス様が居て下さったならと心の底から願ったはずです。その事を二人揃ってイエス様に訴えています。それは魂の底から注ぎ出されたイエス様への祈りとも言えましょう。そして、人の悲しみをご自分の悲しみとして写し取られるイ

イエスは、遂にある事を宣言され実行されます。それは、死を以てその人の全てを終わらせようとは絶対になさらないということです。

イエスはラザロの元へ行かれ、声をかけられます。「ラザロ、出て来なさい」と。そもそも、イエスは「わたしの友ラザロが眠っている」と言われますが、死んだ筈の人を指して、敢えて「眠っている」とおっしゃいます。ラザロは、私たちの先取りとして描かれてもいます。「我は甦りなり、命なり」「我を信ずるものは、たとえ死んでも生きる」、即ち「死をも乗り越え、打ち破る神様のお働きの内に、あなた方も包み込まれているのだよ！」と。

ラザロの危篤から死への道程を目の当たりにしたマルタもマリアも、当初考えたはずです。「死んでしまった以上流石のイエス様でも手の施しようはないだろう」と。だからこそ、その死が襲いかかってくる前にイエス様が居て下さらなかった事を嘆き、悲しみ、非難したことでしょう。

ところが、そのマルタ、マリアに向かってイエス様はハッキリとおっしゃいます。

「そうでは無い！死は神の力の前に在ってはいか程のものでもない！」と。マルタも言います。「主よ、信じております！」と。原文通りに訳しますと、「私どもはずっと、イエス様こそ世に来られるはずの神の子、救い主であられると信じ続けてきております！」と。しかし、一方で不思議な感じもします。信じていたのなら、何故嘆き悲しんだり、批判したりしたのかと。しかし、実は、そうでは無く「イエス様こそ救い主であられるということは、既に知らされていることであり、私どもも、その信仰に授かっているのです。死をも打ち破る神様のお働きの、私たちは既に戴いているということ、今改めて確と確認しました。その信仰を私自身の中に再発見させられました！」と言えます。今、確かにイエス様の中に「我は甦りなり、命なり」「我を信ずる者は、たとえ死んでも生きる」「おおよそ生きて我を信ずる者は永遠に死なざるべし」という神様のお働きを見て取りました、そのことを、今告白致しますと。

いよいよ再来週のご復活への備えを重ねていきましょう。